



家族との最後の別れ

喪主・遺族がおさえないこと

◆ 大まかな流れを確認しましょう

【末期の水】

亡くなりそうなときや危篤に陥ってしまったとき、まずごく近しい人に連絡を入れておく。このことは深夜・早朝の時間でも差し支えないので、速やかに行います。

看取った後、すぐに行うのが「末期の水を取る」ことになります。これは死者の穢れを清めるために行います。

水を含んだ脱脂綿を故人の唇に当てます。順番は故人との血縁が濃い人から行います。

【死亡診断書】

臨終を確認した医師へ死亡診断書の作成を依頼します。遺族はこれをもとに死亡届を記入して、市区町村役場に提出します。

【訃報のお知らせ】

親戚や知人に訃報の連絡を行います。できるならば故人が元気なうちに話しながら、関係者リストを作っておくといいですね。

【葬儀社へ連絡】

並行して葬儀社へも連絡します。病院が紹介する業者に遺体の搬送だけを依頼することもできますが、プランやサービスの内容を検討するために、あらかじめ考えておきましょう。

葬儀社が決まったら、遺体は斎場または自宅などに搬送し、納棺までの間安置します。

【病院以外での死亡】

自宅で看取ったときは、かかりつけの医師を呼んで死亡を確認してもらう。医師が見つからないとか、自宅で一人で亡くなっていたとき、事故などで亡くなったときは警察が「死体検案書」を作成。これは死亡診断書と同じもので、その後の手続きは変わらない。海外で亡くなった場合は、日本国大使館などの署名付きの現地医師の死亡証明書、埋葬許可証などが必要。遺体は、そのまま運ぶか、現地で火葬します。

【喪主】

慣習では故人の配偶者が喪主になりますが、不可能な場合は故人との血縁関係の深い人の順番にします。